聖　書：使徒 14：19〜28
説教題：成し遂げた働き
日　時：2014 年 2 月 16 日

パウロの福音宣教の歩みは「苦しみ」と切り離して考えることはできません。それは彼がダマスコ途上で召命を受けた時からそうでした。9 章 16 節：「彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」それ以来、たくさんのそのようなことが彼の歩みにありました。回心直後にダマスコで宣教した時も、アレタ王の代官がユダヤ人と共謀してパウロを殺そうと昼も夜も町の門を監視しました。エルサレムに上った時もユダヤ人はパウロを殺そうとしたため、彼はカイザリヤからタルソへと送り出されました。この第一次伝道旅行においても最初の訪問地キプロスでバルイエスによる反対活動を受けましたし、小アジアに上陸してピシデヤのアンテオケでも口汚く罵られ迫害されましたし、イコニオムでも石打ちにされそうになってルカオニヤ地方へやって来ました。しかしそんな彼にこれまでで最大の事件が起こります。

パウロはこの時、ルステラにいました。前回見た通り、町の人々はパウロとバルナバの奇跡を見てゼウスとヘルメスの再訪だと捉えて拝もうとしました。パウロはそんな彼らがいけにえをささげようとするのをようやくのことでやめさせました。ところが今度は丸っきり反対の扱いを受けたのです。今回の出来事の首謀者はアンテオケとイコニオムからやって来たユダヤ人たちです。彼らは先に見たように、パウロを激しく迫害し、石打ちにしようと企てていた人々です。その彼らが何とルステラまで追いかけてきた。そして町の人々をも巻き込んで、ついにパウロを石打ちに処したのです。

それにしてもなぜルステラの人々は、こんなにも極端から極端へ変わってしまったのでしょうか。彼らはパウロたちが行なった癒しのみわざを見て、神々だと捉えて拝もうとしましたが、そうでないと分かったら、ではこの人たちは詐欺師であり、ペテン師なのだろうと捉えたのでしょう。何と言ってもパウロたちが通って来た地方に住む仲間がそう言っているのだから間違いない。そんな奴は即刻つぶせ！ということになったのでしょう。その結果、パウロは石打ちにされ、死んだものと思って町の外に引きずり出されてしまいます。パウロはこの町で恐ろしい扱いを受けたのです。

ところがです。続く 20 節に、弟子たちが取り囲んでいると彼は立ち上がったとあります。これは復活したということでしょうか。19 節には「死んだものと思って」とありました。そこにいた人々からすれば、パウロは死んだと判断されるような状態になったのですが、実際には死にまでは至っていなかったのです。大小の無数の石が彼に投げつけられたのでしょうが、致命的なところには当たらなかった。それゆえ、町の外に引きずり出された後、彼は立ち上がったのです。これは信じられないような神の守りと支えがあったことを意味します。

このことだけでも驚きですが、さらに驚きなのは、パウロはこれで宣教をやめなかったということです。彼は一旦ルステラの町に入った後、翌日にはデルベへと向かい、その町で福音を宣べて、多くの人々を弟子とします。そしてさらに驚きなのは、パウロはその後でまたルステラとイコニオム、ピシデヤのアンテオケへ引き返したことです。これまで訪問した南ガラテヤ

地方では、今のデルベが最も東に位置します。ですからそのまま東に進めば、母教会のシリヤのアンテオケへ戻ることができました。ところがパウロはそれとは逆の方向へ歩を進めます。自分を迫害し、石打ちにまでした町々へと戻って行ったのです。なぜでしょうか。それは新しく信仰に入った弟子たちの心を強め、励ますためだったのです。

パウロはⅡコリント 11 章で自分が受けた様々な苦難を列挙していますが、その中の 25 節にある「石で打たれたことが一度」という記述は、このルステラでの出来事を指しているでしょう。またパウロは数カ月後に、この南ガラテヤ地方の教会に対してガラテヤ人への手紙を書きますが、その 6 章 17 節で「私は、この身に、イエスの焼き印を帯びているのです」と語っている部分は、おそらくルステラで受けた石打ちのためにパウロの体に刻まれた深い傷跡を指していると考えられます。そういうパウロがなおこの地の信者のフォローアップのために危険な町へ戻って行ったのです。驚くべき勇気です。パウロは決して種まきだけをしていたのではなく、信者の成長にも心を注いでいたのです。そして確実に主の教会が打ち建てられ、御国が拡げられることに自らをささげていたのです。

さて、パウロとバルナバが南ガラテヤ地方の諸教会を再訪して彼らに与えたアドバイスと励ましが 22〜23 節に 3 つ記されています。一つ目は、「この信仰にしっかりとどまるように」との勧めです。これまでも新しく伝道した土地で彼らが行なって来たアドバイスはこれです。11 章 23 節：「みなが心を堅く保って、常に主にとどまっているように」13 章 43 節：「いつまでも神の恵みにとどまっているように」大切なことは一時的な決心をすることではなく、その後にとどまり続けることです。イエス様の別の言葉で言えば「最後まで耐え忍ぶ」ということです。二人は「この信仰に」しっかりとどまるように、と言いました。この意味はこの「教え」に、「教理」にしっかりとどまるということです。彼らがこれまで接して来た異教の教えとか、従来のユダヤ教の教えにではなく、イエス・キリストにおいて実現された神の救いに、キリスト教信仰にとどまるように、ということです。

パウロたちが与えた二つ目のアドバイスは「私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならない。」ということです。キリストへの信仰を持って救われたから、あとはバラ色の生活が待っているというのではありません。むしろキリストに従う道を行くとは苦しみを通って行くことだとパウロは述べたのです。なぜ救われたのに苦しみをたくさん経験しなければならないのでしょう。それはイエス様を信じるということはイエス様の側に付くことであり、イエス様の側に付くなら必然的に世から多くの苦しみを受ける側に立つことになるからです。ヨハネの福音書 15 章 20 節：「しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。」　そしてこれは単に避けられないというだけのものではありません。私たちは主と同じ側に立ち、主が受けた苦しみをいくらかでも受けることを通して、主と深い交わりに生かされます。主がどんなに私たちのために大きな犠牲を耐え忍んで下ったかがより深く分かるようになります。すなわち主の愛がもっと良く分かるようになるのです。そしてその中で私たちは益々主に似るようにきよめられて行きます。そして主が苦しみの道を通って栄光へ入ったように、私たちも苦しみを通って栄光へ入るのです。今ここでの苦しみは、その後に待っている栄光の前奏曲なのです。

三つ目にパウロとバルナバは、教会ごとに長老たちを立てました。単に信じた者たちが自然に集まっていれば良いのではなく、ふさわしいリーダーたちがその群れごとに立てられる必要があります。ここで「長老たち」と言われているように複数のリーダーが立てられました。これは教会が独裁にならないように、複数で、チームで牧会に当たるようにという原則を示すものと見ることができます。そしてパウロとバルナバはただ長老たちの顔を見て委ねたのではなく、断食をして祈って「主に」委ねたとあります。主が長老たちを用いて、働きを進めてくださることに信頼して祈り、主にお委ねしたのです。

こうして後、パウロとバルナバは帰途に就きます。二人はピシデヤから南下して地中海に面するパンフリヤに着き、ペルガに着きます。そこで福音を語ってアタリヤ、今日のアンタルヤから船に乗ってシリヤのアンテオケへと帰ります。シリヤのアンテオケは異邦人宣教の拠点となった教会であり、パウロたちが以前送り出されたところです。13〜14 章に記された第一回世界伝道旅行は決して個人的な伝道活動だったのではなく、それは教会から派遣され、教会の祈りと支援のもとになされた教会的なわざでした。ですからその教会に帰って報告したのです。そして注目したいのは、パウロたちはその働きを「いま成し遂げた」と言われていることです。彼らはアンテオケ教会からこの働きに派遣されましたが、その働きを最後まで果たし終えたのです。この一つの言葉で思わされることは、私たちはしばしば始めることは始めるが、最後まで成し遂げない内にやめてしまうことがあるということです。どうしてそうなるかと言えば、様々な困難が生じたり、想定外の状況に至ったからということがあるのでしょう。しかしパウロのこの伝道旅行を振り返れば、それは困難の連続でした。どの町でも反対活動があり、むしろそれは益々強くなるような旅でした。パウロは晩年に書いたⅡテモテ 3 章 11 節でこう言っています。「またアンテオケ、イコニオム、ルステラで私に降りかかった迫害や苦難にも、よくついて来てくれました。何というひどい迫害に私は耐えて来たことでしょう。」　ところがパウロはこれらの関門をみな突破して、ついにこの第一伝道旅行のわざを最後まで果たし終えたのです。この「成し遂げた」という言葉は、私たちにチャレンジを与える言葉ではないでしょうか。

しかしその彼がアンテオケ教会で何と報告したかにも注目したいと思います。彼らは 27 節にあるように、「神が自分たちと共にいて行なわれたすべてのこと」として報告しました。確かに出かけて行ったのはパウロたちです。人々に福音を語ったのはパウロたちです。しかし道を切り開き、事を導いてくださったのは神であると彼らはあかしした。最初の訪問地キプロスでも妨害者バルイエスへの奇跡をもって、総督を入信へ導いたのは神でした。ピシデヤのアンテオケで異邦人が救われたのも、神の選びと聖霊の働きによることでした。13 章 48 節：「永遠のいのちに定められていた人たちは、みな、信仰に入った。」イコニオムでも反対の嵐の中でパウロたちは主により頼んで伝道し、主がパウロたちの恵みの御言葉の証明をされました。ルステラでも石打ちにされながら奇しい仕方で守られたのは神によることでした。このように彼らのすべての働きは神によって支えられ、導かれたことでした。二人は共にいてくださる神に信頼し、神に守られて成し遂げたのです。それゆえに彼らは一切の栄光をただ神に帰します。そしてこの神が異邦人に信仰の門を開いてくださったと報告したのです。

私たちは今日の箇所から何を学ぶでしょうか。私たちもそれぞれ神から使命を与えられています。この世に遣わされての働きもそうですし、教会における奉仕もそうです。私たちはその働きをいくらかの困難があったら途中で放り捨てる者でしょうか。それとも最後まで成し遂げる者でしょうか。パウロは「私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならない。」と言いました。ですから与えられた務めに励む中で、少し苦しいことにぶつかったからと言って、それを投げ捨ててはならない。それは主と共に歩む者の光栄なしるしでさえあって、その先に待つ栄光への序曲でさえあります。私たちはその目の前にある困難をどうやって乗り越えることができるでしょう。今日の箇所が教えてくれることは、それは共にいてくださる神の力によってなすことであるということです。ピリピ書 2 章 13 節に、志を与えたもう神は事を行なわせてくださる神であるとあります。神は私たちに働きや使命を与えるだけではなく、それを成し遂げるための力も一緒に備えて下さるお方です。パウロとバルナバはアンテオケ教会に帰って、第一次伝道旅行を「神が共にいて行なわれたすべてのこと」として報告しました。私たちも同じ恵みに生きるように招かれています。私たちの日々の働きも、共にいてくださる神によって最後まで成し遂げるべきものとして与えられています。この神を見上げ、神の臨在と力を求めて、困難を乗り越え、与えられている使命を最後まで成し遂げる歩みに進みたい。そしてそれをなし遂げた日には、共にいてくださった神によってこれができた！これは神がなさったことである！と告白して一切の栄光を神に帰す歩みをささげたいと思います。